

令和6年度 学校評価報告書

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月12日実施)	総合評価(3月28日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	①インクルーシブ教育実践推進 校としての取組を軸として、授業のユニバーサルデザイン化を推進する。	①すべての生徒を対象としたユニバーサルデザインの視点での授業を研究及び実践する。	①授業に参加した生徒全員が、理解を深めることができるように組織的な授業研究を行う。	①年間を通して、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直し、改善することができたか。	①定期テストや実習、授業レポート等の評価を各教科・科目内で共有することにより、共通認識をもって成績管理を行うことができ、授業後の振り返りの活性化にもつながったことから、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直しするなど改善ができたとして評価する。	①ワークシートを学年で統一する、授業レポート等の評価を各教科・科目内で共有することにより、成績管理を行うことができ、授業後の振り返りの活性化にもつながったことから、ユニバーサルデザインの視点で授業及び使用教材を見直しするなど改善ができたとして評価する。	①定期テストや実習、授業レポート等の評価を各教科・科目内で共有することにより、成績管理を行なうことができた。生徒も教員も毎年入れ替わる中で、取組を形骸化しないようにすることが課題となる。また、インクルーシブの視点を授業にも取り入れているが、単元や内容によって難しいこともあった。	①ユニバーサルデザインの視点をもってインクルーシブ教育をさらに充実させていくことが必要である。インクルーシブの視点で教科指導を実施する際に見られた課題の解決に向けて、学校全体での検討や他校の情報を参考にするなど組織的な改善をしていく。	
	②組織的な授業改善を重ねることで、生徒の学習意欲を喚起し、基礎学力の定着を図るとともに、「自ら学び続ける生徒」を育てる。	②継続的な授業改善や一人一台端末の活用方法について、教員間での情報共有を行うなど、生徒の学力向上を推進する。	②一人一台端末の有効活用、アクティブラーニング型授業の工夫など、生徒の意欲を喚起し、学力向上をめざした授業づくりを推進する。	②端末の活用状況を含め、教科横断的に授業見学を2回以上行い、授業研究会を通して授業の最適化を図ることができたか。	②端末を用いての小テスト実施や、実技科目においては検索動画を共有したり、閲覧し合ったりすることにより、主体的に学習する意欲の向上がみられた。	②各教科内での授業改善は日々進捗しているが、他教科から得られる知見も考えられるため、教科横断的な取組を計画・実施していく。	②端末を用いての小テスト実施や実技科目において検索動画の共有や閲覧することで、主体的に学習する意欲の向上がみられた点で、授業の最適化を図ることができたと評価する。	②教材研究を進め、端末がどのように利用できるか研究を進めている。その成果として、生徒が主体的に学ぶ姿勢が多く参られてきている。すべての教科・科目での活用も課題となる。	②一人一台端末の利活用が進んでいるが、より多くの教科、科目で授業改善と連動するように研究を進める必要がある。校内において、より効果的な活用方法を実践するため、他校の報告を参考にしたり、研修会等に参加したりする必要性がある。
2 生徒指導・支援	①「生徒支援」の観点から、安全・安心な学校生活を保障する。また、教育相談体制を充実させ、生徒のサポートを徹底する。	①生徒の安心安全な学校生活に資するため、一人ひとりの生徒に寄り添い、組織的に支援する。	①かながわ子どもサポートドックを活用した積極的な教育相談により、教育相談を充実させ、積極的な支援につなげることができた。困り感のある生徒に対して支援につなげることができた。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができた。困り感のある生徒に対して支援につなげることができた。	①SC、SSWとの連携が今後の課題である。生徒のサポートにおいて、専門的な知識を生かし切れていないと感じる。組織的に考えていく。	①かながわ子どもサポートドックを積極的に活用することで、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができ、生徒に対して支援につなげることができた点が評価できる。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により、面談の機会が増え、教育相談の充実を図ることができ、生徒に対して支援につなげることができた。一方では困り感のある生徒が回答に自分の気持ちを伝えているか課題もある。	①かながわ子どもサポートドックの本格導入により生徒の困り感の解消に成果を上げている。しかし、担任、養護教諭、SCやSSWとさらに連携し、さらに合理的なものとなるよう検証や実践事例の共有など校内で組織的に進めていく必要がある。	
	②自己表現・自己実現ができる豊かな人間性を育むため、学校生活の中で生徒が活躍し、成功体験を積む機会を設定する。	②学校行事や部活動等における目標や意義を示し、生徒自ら実践・振り返りを通して達成感を体感させる。	②自分自身の役割を自覚させることで、学校行事や部活動等で生徒自ら考え、実践する力を養う。	②さまざまな教育活動を通して、生徒主体の取組により意識の変容や達成感を数値により評価ができたか。	②体育祭の充実感(満足度)は86.8%の生徒が、文化祭の充実感は94.5%の生徒が肯定的であった。球技大会においても生徒が自主的に運営できていた。	②部活動を通じて達成感を体感できている生徒(部活動加入率)を増やしていく。委員会活動が教員主導になりがちなので、生徒主体の活動を増やすよう改善していく。	②体育祭の充実感は86.8%の生徒が、文化祭の充実感は94.5%の生徒は肯定的であった。また、球技大会においても生徒が自主的に運営できていた点から、教育活動を通して、生徒主体の取組により意識の変容や達成感を数値により見える化できたことも評価できる。	②体育祭、文化祭は多くの生徒が計画、準備、実施まで積極的にかかわり、生徒主体の行事を進めることができた。行事を通して生徒の成長も感じられ、さらに充実感を高める工夫が課題となる。	②学校行事や部活動等を通して生徒自ら自分自身の役割を自覚させが必要である。一人ひとりの生徒にホームルーム活動や部活動など多くの場面で支援していく必要がある。
3 進路指導・支援	①生徒一人ひとりが自己理解を深め、職業観や勤労観を養うことで、主体的に	①さまざまな活動の機会を通して、生徒に職業観・勤労観を身に付けさせる。	①「総合的な探究の時間」を活用するなど、生徒のキャリアプログラムを計画し、生徒に充実感を与える支援	①本校生徒の実情に適合するキャリアプログラムを計画し、生徒に充実感を与える	①年間を通じて、各学年の実情と実態を踏まえてのキャリアプログラムを再考し、多様化する選抜方	①生徒が充実感をさらに得られるようなキャリアプログラムを得ることができた点が	①年間を通じて、各学年の実情や実態に合わせたキャリアプログラムを実施しており、生徒の希望する進路の実現に成果を上げている。生徒の多様な進路先の対応や選	①3年間を見通したキャリアアップログラムの精査や検討がさらに必要である。また、大学入試等の情報収集を進めるとともに、入学年度で異なる生徒の進路意	

	自らの将来を考える姿勢を育てる。 ②キャリア教育の柱として、高校卒業後の将来設計を考えさせる探究活動を重視する。	をおこなう。	えることができたか。	でき、各生徒が充実感を得ることができた。	式へ対応できるよう内容を考える必要がある。	評価できる。	抜方法への課題もある。	識や入学試験への考え方など、的確に把握して生徒が安心して進路を決められるよう整備する。 ②年3回実施しているキャリアガイダンスが、多様化する生徒の実態に即してしているかアンケートをもとに検証する必要がある。学習コンテンツの活用方法については、活用の実態を踏まえ、生徒からの希望も踏まえ、より学習成果をあげられるようキャリア支援グループにおいて検討していく。
4	地域等との協働 ②地域への貢献と、地域資源の活用を両立させ、「地域社会とともに育ち・伸びる学校」をめざす。	①持続可能な学校づくりをめざし、教育活動の情報を発信し、本校の魅力や課題を共有し、改善につなげる。 ②「地域の中の学校」として、地域貢献活動を充実させるとともに、教育連携を締結している上級学校を活用し、生徒の資質向上を図る。	①教育活動の成果を発信するとともに、外部からの意見を聴取し、本校の取組をさらに充実させることができたか。 ②効果的な活動とするため、現行の地域貢献活動を精査する。また、教育連携先を整理し、教育人材を派遣してもらうことで、生徒の進路活動に生かす。	①週1回ホームページの更新を行い、最新の情報と意見を保護者や中学生、地域住民に提供することができたか。 ②地域貢献活動における地域人材・資源の活用を拡充させることができたか。	①週1回ホームページの更新を、評価の観点としたが、古いものの削除と更新を関係部署に依頼するまでの流れを明確にして、ホームページが定期的にタイムリーな更新に取り組めなかった。 ②進路指導や外国語学習で、校外の地域人材を活用する場面があったが、地域というレベルでの取組を積極的に行うことができなかつた。	①週1回のホームページの更新ができないよう、内容について、担当者が依頼から更新までの活動にとどまり、定期的かつタイムリーな更新に取り組めなかつた点について、未達成と評価する。 ②自治会や周辺企業と連携し、地域の人材やコミュニティ活動の情報を収集する。その内容を踏まえて、地域と連携できる企画を立案・実施する。	①週1回ホームページの更新を、評価の観点としたが、古いものの削除と更新を関係部署に依頼するまでの活動にとどまり、定期的かつタイムリーな更新に取り組めなかつた点について、未達成と評価する。 ②教科指導における外部人材の利用は見られたものの、地域と連携した教育活動の取組ができなかつた。課題となつた。	①教員のスキルの問題で更新が定期的に進んでいないことが考えられる。マニュアルの整備や研修会を通して、誰もがホームページを扱えるようにする。「シチズンシップ教育」、「人権教育」など本校の取組についての情報を掲載するなど内容の刷新も検討したい。 ②学校周辺の自治会、地元企業等との協働やボランティア活動など、生徒が様々な場面で参加できる場面が必要である。教員と地域の方々との情報交換などをする機会を積極的に設ける必要がある。
5	学校管理 学校運営 ②全職員が学校運営上の課題を共有することで、事故・不祥事防止の徹底を図る。	①ユニバーサルデザインの観点から、学校全体を検証し、すべての生徒にとって安全・安心な学習環境を整備する。 ②職員が自校の課題を認識し、改善を図ることで、事故・不祥事ゼロを実現し、協働的で働きがいのある職場環境をつくる。	①ユニバーサルデザインの観点で学習環境の評価・検証を行い、生徒にとって安心、安全な学校づくりを推進する。 ②ヒヤリハット事例や職務上の困り感を職員同士が共有するなど、コミュニケーションを大切にした、風通しの良い職場にするなどをめざす。	①インクルーシブ教育実践推進校として、本校のユニバーサルデザインの観点を確立し、生徒の学校生活を支援する。 ②各自の業務を点検し、報告・連絡・相談を適切に行い、事故・不祥事ゼロを達成できたか。また、月2回以上事故・不祥事防止に係る情報を職員に提供できたか。	①教育活動に係る環境を教職員が常に点検し、課題や予見できる事象について共有し、改善することができたか。 ②毎月職員会議、朝の打合せにおいて不祥事防止や事故防止に係る資料をもとに職員全体で共有した。また、管理職と教職員が話しやすい環境づくりを職場全体で取り組めた。	①全生徒の相互理解を促進し、安心して学校生活を過ごせる機会を設けるために、複数学年が一緒に学ぶ相互理解学習会を計画し、全6回実施した。 ②企画会議における不祥事防止会議をはじめ、毎月2回以上、視点を変え、時機逸することなく、職員へ啓発を実施した。次年度も事故・不祥事ゼロをめざしていく。	①全生徒の相互理解を促進し、安心して学校生活を過ごせる機会の工夫を、相互理解学習会を実施するなど、教育活動に係る環境を教職員が常に整備し、課題や予見できる事象を共有しつつ改善が進んだ点を踏まえ、達成できたと評価する。 ②計画的に不祥事防止や事故防止に係る資料をもとに職員全体で共有するなど職場全体での取組や職場環境の改善を進めている点から達成できたと評価する。	①今年度は初めての取組として、生徒の反応を観察しながら実施した。参加生徒からのアンケートや聞き取りを行い、生徒の実態を踏まえ、学習内容や学年の組合せなど検討が必要である。 ②不祥事防止や事故防止の研修では、経験の浅い職員が研修講師として担当することで、「自分事」と意識できるようにした。また、小さな工夫、職員からのアイデアも募りながら、「同僚性」の意識をもって業務を進めたい。

